

日本語クラスにおけるナレーション導入効果の検証
 —カナダと日本の大学における教室活動—
 Verifying the Effect of Using Narration in Japanese Classes
 — The Report from Canada and Japan —

王伸子, 専修大学
 シャープ昭子, カルガリー大学
 Nobuko Wang, Senshu University
 Akiko Sharp, University of Calgary

1. はじめに

日本語教育の現場において、学習者が日本語を声に出し、耳で聞く機会を与えたいというのは、日本語教師であれば、効率的に取り入れたいと思っている教室活動である。しかし、音声だけに重点を置くのは時間配分的にも難しく、できれば4技能を活性化できる教材や素材を用い、聞いたり話したりする活動も取り入れたいと考えているであろう。そこで、「ボイスサンプル」という素材を使用し、4技能を活性化しながら日本語に接する機会を増やすという試みを、日本の大学とカナダの大学の外国語としての日本語科目の授業内で、試行錯誤しながら2年間実施した。本稿では、その実践報告を中心に、どのような効果があったのかということを実質的報告によりおこなうものである。

1.1 先行研究

これまで、音声を素材とした言語学習の方法に関する研究としては、ディクテーション、ディクトグロス、シャドーイングなどがあげられる。短い文を扱うディクテーションや、まとまったものを聞いて文章を再生するディクトグロス、また、同時通訳の訓練方法であるシャドーイングなどが言語学習には応用されている。しかし、ボイスサンプルを教材として使用した報告は王・大塚（2017）、王・シャープ・善積（2018）のほかは見られず、新しい着眼点の指導法であると言える。本稿では、こうした研究を踏まえ、学習者や学習環境の異なる日本とカナダの大学における日本語科目のクラスで、この素材を使用して、学習者がどのような成果を上げたのかという実践報告を行いながら、どのような成果があり、さらにどのような問題点があるのかということを確認することを目的としている。

1.2 ナレーションとボイスサンプルについて

少し長いナレーションを言語学習の素材として使うという試みを実践したが、テレビ番組やラジオ番組で流されるナレーションの長さはさまざまであり、また、その素材をまとめて入手することは困難である。そこで、ナレーションを読み上げるナレーターが、仕事を獲得する際にオーディションを受ける前に提出する「ボイスサンプル」に着目した。ボイスサンプルはボイスデモとも称されることがあるが、声を仕事のツールとして使用している職業人が、どのような声で、どのような表現ができるのかということをアピールする、プロとしての声の名刺の

ような宣伝材料である。これについては、王・大塚（2017）でも詳しく説明している。1本のサンプルの長さは2分ほどにまとめられており、学術的解説からCMまで、さまざまな場面を想定した原稿を読み上げ、それに背景音楽（Back Ground Music 以下、BGM）を付加したり効果音を入れたりして、聞く人を惹きつける構成になっている。録音の冒頭部分に自分の名前を名乗り、自己紹介をおこなう構成になっているものが多いのも、ボイスサンプルの特徴であり、ナレーター、声優、司会業、フリーアナウンサーなど、声の仕事をする職業人の声によるポートフォリオだと言える。この作成過程を言語学習の4技能の活性化に活用しようという試みをクラスで実践することを、ボイスサンプルプロジェクトと名付け、行ってきた。

ボイスサンプルを素材として使用することから始めたが、できれば、少し長いナレーションを素材として使い、その表現を学び、外国語の運用能力を上げることを目指そうと、試行錯誤している。

ページのサイズは Letter サイズ（8.5x11 インチ）である。ページサイズやマージン、フォント、フォントサイズ、行間などは変更しない。

1.3 ボイスサンプルの作成過程

ナレーターや声優のプロは、その表現力を磨くために、手本となるボイスサンプルを模することから始め、完全にコピーするように、つまり真似して（imitating）、その音声表現を獲得する。声の高さ、大きさ、読み上げるスピード、間の取り方など、あらゆる特徴を真似していくのである。鎌田他（2007）では、オーディオリングメソッドにミミック（mimic）＝模倣する、ということが当該教授法の特徴だと述べられており、すでに、聞いて模倣するという過程が言語学習には重要であると認知されているが、模倣というより、細部まで徹頭徹尾真似をするという意味で、むしろそっくり真似をするという imitate という英語を用いるほうが、この指導法では適当だと思われる。

そのボイスサンプルを作成する手順は以下の通りである。

- ① 原稿を準備する
- ② 読みあげの練習をする
- ③ 録音する
- ④ 録音を聞く
- ⑤ 保存版を録音する
- ⑥ 編集、BGM、効果音を付ける

以上の過程は、言語教育に必要な、真似をする→自動化して運用する、という Anderson（1985）、Bialystoc（1978）、Ellis（1984, 1985）ですでに言及されている、習得理論の「習得とその運用能力の自動化」と言う側面にも合致していると思われる。

2. 授業での実践例

実際に、日本の大学とカナダの大学での、外国語としての日本語科目でこのプロジェクトを取り入れた実践例を報告する。

2.1 日本の大学での実践例

S大学の学部1年次生の必修科目は4技能を支援する4科目を設置している。その一つである「日本語音声理解」科目の中で本プロジェクトを実施した。それに関する講義計画は以下の通りである。

<講義計画>

前期

- (1) 1年の授業進行について
- (2) 聞いて理解するということはどのようなことか (教材と辞書について)
- (3) 基本練習について
- (4) 聞いて表現する日本語・ボイスサンプル、CM 聞く
- (5) 聞いて表現する日本語・ボイスサンプル、CM 選ぶ
- (6) 聞いて表現する日本語・ボイスサンプル、CM 原稿作成
- (7) 聞いて表現する日本語・ボイスサンプル、CM 練習
- (8) 聞いて表現する日本語・ボイスサンプル、CM ボイスサンプル作成1
- (9) 聞いて表現する日本語・ボイスサンプル、CM ボイスサンプル作成2
- (10) 聞いて表現する日本語・ボイスサンプル、CM 発表
- (11) 聞いて表現する日本語・ボイスサンプル、CM 発表
- (12) 聞いて表現する日本語・ボイスサンプル、CM 映像の説明1
- (13) 聞いて表現する日本語・ボイスサンプル、CM 映像の説明2
- (14) 聞いて表現する日本語・ボイスサンプル、自由課題1
- (15) 聞いて表現する日本語・ボイスサンプル、自由課題2

2.1.1 実践例と評価

音声に焦点をあてた授業であったため、このプロジェクトを利用して、前期の授業をおこない、4技能を活性化することを目指して授業をおこなった。授業内だけでおこなえることには限度もあるので、授業以外でおこなう課題も出し、練習、録音等は学習者個人が活動するという形式を取った。

評価については、前述の活動の努力が反映されるように、

- ② 聞いて書き起こした原稿
- ② 原稿を見ながら音読するパフォーマンス
- ③ 最終的に作成したボイスサンプル

以上の3点を評価の対象とした。また、学習者各自が作成したボイスサンプルを全員で聞き、最終的に投票をおこなって互いに順位をつけ上位3人を選出したが、順位をつけるということでもかなり張り切った学生も出てきた。

2.1.2 学生へのフォローアップ調査

このプロジェクトを取り入れた実践授業を実施した後、学生に感想を送信してもらった。以下の通りである。なお、この提出は、成績評価提出後に、授業とは別に実施したものである。

学習者 A (中国出身)

- ・前期の絶叫型のものは、なんか違う自分を見つけたような気がしまして、それにストレス発散に役立ちそうです。後期のナレーションは発音に厳しいので、練習するたびに、自分の発音が良くなった気がします。話すときはまだですが、文章を読む時に促音や長音を注意するようになりました。話すときもできるだけ注意していますが、内容を考えるだけでもう精一杯で、注意しようとしてもなかなかうまくできません。

学習者 B (中国出身)

- ・中国の南エリアの出身で、「ら」と「な」の音が時々間違えて発音した事があります。録音した音声でその点を気づきまして、何遍もの練習を通じて以前よりだいぶよくなったと思います。

学習者 C (中国出身)

- ・自分で素材を聞いて、原稿を作って、聞き取る能力が上がったと思います。日本語を話すとき、ゆっくり話すこと、しっかり発言することとイントネーションはとても重要なことだとわかりました。私は日本語を話す時、日本語で発表する時、よくスピードが速いと言われます。この授業で、ゆっくり話すことは大事だとわかりました。とても役に立つだと思います。今後も、意識しながら、日本語を話したいです。
- ・ポイズサンプルを作った時一番大変なことは録音です。練習して、よく間違っていたところを繰り返して、何回も録音をしました。とても大変でした。私はパソコンが苦手ですから、録音に音楽を付けることも難しいと思います。

学習者 D (中国・香港特別行政区出身)

- ・前期のボイスサンプルはせっかくなのでよくナレーションやCMで聞く声優さんのボイスサンプルを選びました。内容も各パートの雰囲気が違うのでボイスサンプルを作る点としてもいいんじゃないかなと思ってます。後期は前にボイスサンプルをやったので、ナレーションをやりました。
- ・元々もっと長いやつにするつもりだったのですが、これくらいの長さがいいのかなと思って。ちょうどこの番組を見返してたので、ナレーションもいい感じだし、この番組を切り取って課題にしました。大変だったところは実際あまりなく、強いて言えば部屋がちょうど大きな道路の横にあるので、車がどんどん通り過ぎていく音がマイクに入ってしまうことですね。なので録音は深夜か早朝に録ってます。

学習者 E (中国出身)

- ・最初、前期のCMを読むとき、緊張のせいで、ついついに速さが早くなって、発音も間違いところが多く出ました。しかし、最後バージョンは、最初のものに比べて、ずっとよくなりました。そして後期で練習した時は、前期で練習の時より、楽になりました。

学生 F (中国出身)

・何度も何度も聞き、書き取りました。(30回以上聞いた)
最初はたいへんだと思ったけれども、うまくできてくると楽しくなりました。促音が怖くなくなった気がします。

学生 G (中国出身)

・一人で大きな声で練習していると、ストレス解消にもなるし、とてもよかった。

学生 H (中国出身)

・先生が決めたものではなく、自分が好きな内容・長さのものが選べるので、やる気になります。

最後に、YouTube にアップした学生のボイスサンプル例をあげておきたい。

学習者 A ボイスサンプル (中国人学生) <https://youtu.be/VI97Db-L2Cg>

2.2 カナダの大学での実践例

C 大学にける実践例は、2 年目 (JPNS301 & 303) と 3 年目 (JPNS331 & 333) のクラスでおこなったものである。2 年目のクラスは週 3 時間の授業と 1 時間のラボをおこなっており、3 年目のクラスは週 3 時間の授業をおこなっている。教科書は、2 年目のクラスでは「げんき book 2」を使用しており、3 年目のクラスでは「中級の日本語」を使用している。

2.2.1 実践例と評価

まず、ボイスサンプルを教材として導入するときの問題点として、時間的制限があげられた。つまり、13 週間で教科書の 6 課分をカバーしているため、他のことを入れる余裕がなかったのである。クラスの定員は 32 人だが、1, 2 年生は waiting list には 20 人も登録している状態である。1 クラス 30 人での展開となるので、発音指導の時間はほとんどとれないのが現状であった。また、ラボの時間は、オーラルテストやプレゼンテーション、多読に活用しており、本来のラボとしては使っていないことが多い。そこで、学生があまり得意ではない「敬語」に着目し、敬語を説明した独自のナレーションを作成し、それを学生が練習するのはどうだろうかと着想し、素材として取り入れてみた。

その手順は以下のようである。

- ① 敬語を習った後、「敬語」について書かれた文章をクラスで読む。
- ② 内容を理解して、練習を始める。
- ③ ナレーターに録音を依頼する。

その後、以下のように練習をおこなった。

- ・教師の読みを参考にして、クラスで読む練習をする。
- ・クラスで一斉に読む。

- ・ペアで読む。
- ・3人で読む。

この作業を約2週間続け、その後、各自のボイスサンプルを提出させるという手順である。提出条件は、まず各自のナレーションを録音し、音楽をつけ、締め切りまでにYouTubeにアップロードするということである。アップロードしたくない学生については、あらかじめ教師に連絡をし、別の方法で録音を聞くこととした。YouTubeにアップするというので、録音をみんなで共有することができるので、ペアで評価するということも可能になった。

成績に反映させる評価については、日本語の発音を重視するよりも、表現全体として、説明したい内容が適切に伝わっているか、楽しく取り組んでいるかということを見ることとした。とにかく、初めの一步でもあるので、今回はそのような評価と学生同士のピア評価の意見等も取り入れ、通常の評価にプラスする形で評価をおこなった次第である。

2.2.2 学生へのフォローアップ調査

学生のYouTubeにアップしたボイスサンプルは、以下の通りである。

学生 A (JPNS331 Fall 2018)

<https://www.youtube.com/watch?v=oHcbnCGF4Z8>

学生 K (JPNS303 Winter 2019)

<https://www.youtube.com/watch?v=czPiTthDfW0&feature=youtu.be>

学生 L (JPNS303 Winter 2019)

<https://youtu.be/N3sRhj7r8ac>

3. 今後の展望

今回は、5年前から発表者二人が取り組んできた、ナレーションやボイスサンプルをクラスに取り入れるという方法の最初の総合的な実践報告である。当初の実践計画は、多くの日本語教師にこの方法を提案するため、教師研修を並行して行い、この素材の使用方法を伝え、他の実践例についてどのような効果が上がったかということ进行调查することも含まれている。これまで、4か国7か所で、ボイスサンプルを授業に取り入れるための教師研修を実施し、今年も、さらに2か所で実施する予定である。今後は、教師研修を受けた日本語教師がどの程度、クラスの中でこれを取り入れたのか、また、取り入れた結果、学習者の4技能にどのような上達が見られたか、どのように効果があらわれたのかということ細かく記録できるチェックシートも用意し、その効果をさらに質的に収集して結果を出したいと考えている。

そのためにもナレーションやボイスサンプルの素材をさらに収集することと、原稿のバリエーションも検討することが次の課題である。すでに、複数のナレーターにはこの件を依頼済みであり、オリジナルのナレーションを用意する準備を進めている。

また授業内でのプロジェクトの取り入れ方も、プリタスク、メインワーク、仕上げ、公開などの過程を提案できるように作成中である。学習者の成果物とそのプロセスに対する評価については、ループリックを作成し提案する予定である。

本プロジェクトについては、引き続き言語教育の有用な素材とするべく、検討を続けていく予定である。

参考文献

- 王伸子・大塚明子 (2017) 「「ボイスサンプル」を応用した日本語音声指導の研究」『CAJLE2018 大会 Proceedings』 272-278. Canadian Association for Japanese Language Education
- 王伸子・シャープ昭子・善積祐希子 (2018) 「新しい日本語音声指導法「ボイスサンプルプロジェクト」の教材化とその評価」『CAJLE2019 大会 Proceedings』 299-306. Canadian Association for Japanese Language Education
- 鎌田修・川口義一・鈴木陸 (編著) (2007) 『日本語教授法ワークショップ増補版』 凡人社
- Anderson, J. R. (1985). *Cognitive psychology and its implications*, (2nd Ed.). NY: W.H. Freeman.
- Bialystoc, E. (1978). A theoretical model of second language learning. *Language Learning*, 28, 69-84.
- Ellis, R. (1984). A theory of instructed second language acquisition. In N. Ellis (ed.) *Implicit and Explicit Learning of Languages*. San Diego, CA: Academic Press.
- Ellis, R. (1985). *Understanding Second Language Acquisition*. Oxford: Oxford University Press

付記

本研究は平成 29 年度より 3 年間の文部科学省科学研究費基盤研究 C (研究代表者: 王伸子 課題番号 17K02866) として採択されている研究成果の一部である。